

文学部 生活科学部 看護学部 経営学部 小論文

(解答はすべて解答用紙に記入すること)

次の文章は、映画監督河瀬直美氏が書いた新聞記事です。この記事を読み、あとの設問に答えなさい。

今年で4回目となる田植えを6月の半ば、梅雨の晴れ間に行った。老若男女、総勢50人ほどの仲間が集まり4枚の田んぼに手で稲を植えてゆく。初めての者もいれば、4年連続関わっている者もいる。朝の8時から現地集合で実際に田に足を踏み入れてから2時間ほどですべての作業が終了した。

子供たちも裸足で田に入り、せつせと自分の場所に稲をさしてゆく。その無垢な魂はコンピューターゲームを与えればそれに集中し、こうして田畑を与えればそれに集中する。つまりは子供の純真な心は、多分にその環境に適合するようにできている。また近くにいる大人がその時、どんな言葉を彼らに投げかけているのか、それを楽しんでいるのか、無理やりやらされているのか、その態度によっても子供が受ける感覚は違ってくる。親の背中を見て子は育つとは昔からよく言ったものだ。百の言葉よりも、ひとつの行動をもつてして、やっと説得力のある話ができるというものだ。

こうして植えられた稲は、まったく農薬を使わず、肥料も入れず、その土地の力と水の清らかさだけで穂を実らせる。去年は米の一部が黒くなっているものがあって、そのおかげで試しに行った農協での査定は「良」には到底なれなかった。もちろんこの米は販売を目的にしておらず、皆で豊作に感謝して薪で炊いた新米を食したあとは、各家庭に分配する。

少し黒くなった米が米特有のカメムシによるもので、カメムシがいるということは農薬を使っていない証拠であると知っては、農協の査定に悲観するよりも、自然の力のみで育った米のうまみに感謝する。カメムシが吸った米にまったく害はない。白く見える米の方が農薬に汚染されたことによつて、人体に悪影響があるのかもしれない。これは誰かの決めた安全な「レベル」をはかり、それに安心して食すという話ではない。何故、黒くなった米では駄目なのか。おいしいということはどういうことなのか。そしてそれを判断するのは誰なのか。そのことに思いをはせることに意味があるのだと私は考える。

私たちは目に見えるものの美しさだけを追い求めて、本来の美しさに寄り添えなくなってしまっているのではないだろうか。すべてが同じカタチで陳列されたスーパールの野菜よりも、ねじ曲がったり太さが違ったりする野菜の方が、十人十色、味があるではないか。その判断は自分が食べて本当においしいと思えるものをおいしいと言うことで楽しみも増えるというのに。

先ごろ行ったフランス・カンヌの旧市街にある市場では、毎朝近郊農家の新鮮な野菜が所狭しと並んで販売されていた。それらはカタチが不ぞろいなものもたくさんあって、それが逆に新鮮に感じた。イチゴも大きいものや小さいものが入り交じって籠に並んでいる。量り売りをしているおじさんたちの表情はとても明るい。英語がほとんど通じない市場でも彼らの表情から、コミュニケーションが成立するのだ。フランスは農業大国。パリ市内にもスーパーはあるが、街角の八百屋もきちんと営業している。日本ではすっかり消えてしまった町の小さな八百屋さんの姿が思い出されていとおしい。すべてが均一化する世界よりも、多種多様にそれぞれがそれぞれの美しさを主張しながら、認め合い共存する世界の方が豊かだとわたしは思う。

カンヌからの帰り道にランスという町でブドウ畑を見学し、カーブというシャンパン製造の会社が所有する貯蔵庫をいくつか見学した。良質なブドウと気の遠くなるような発酵過程の説明を聞きながら、この土地の人々が製造に誇りを持ちながら携わっている様を垣間見、何事も人の関わり次第でそれらが息づくのだということを実感した。

いずれの「ものづくり」も人とのコミュニケーションが主題になって初めて意味があるのだということをしっかり刻んでゆきたいと思う。

(2016年7月3日付け毎日新聞朝刊「くらしナビ」欄より見出しおよび写真等、一部を省略して用いた)

設問一 この記事の中で、筆者の主張が端的に述べられているとあなたが考える一文を、65文字以内で抜き書きしなさい。

設問二 あなたが、茨城キリスト教大学の各学科で学ぼううえで大切にしたいことについて、設問一の内容を踏まえて800字以内で述べなさい。